

13/03/17

閑古鳥が鳴く

渡邊正己

京都大学・名誉教授

公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事
(msm@rbent.jp)

西行が「山里にこは又誰を呼子鳥、独りすむまとおもひしものを」という歌を詠んでいます。彼がどのような心境で詠んだのか判りませんが「山里でひとり世俗から離れてひっそりと暮らそうと思ってきたのに、郭公がしきりに鳴いているのを聞くと自分が世俗から呼ばれているような気がする」ということなのでしょう。その歌に寄せて芭蕉は去来の落柿舎に滞在して編んだ「嵯峨日記」で「憂き我を寂しからせよ閑古鳥」と詠みました。「こんな寂しい嵯峨野に居ても、世に対する思いは乱れ妄想を絶ち難い。お前が物悲しい鳴き声を聞かせてくれれば、そんな思いから離れて心が落ち着くだろう」という思いを表しています。俳人として世俗にまみれないことが研ぎすまされた感性を維持するために重要であるのでしょうか。

私も、停年後、西行や芭蕉が求めたような心の静けさを求めて田舎に鄙家を求め、晴耕雨読と自給自足の日々を送るのが夢でした。しかし、今の私は、63回目の誕生日に発生した未曾有の東日本大震災とそれに引き続く福島原発事故によってとても心平安な日々を送ることはできていません。原発事故後に福島県民に限らず多くの国民に沸き上がった「放射能に対する不安」を深く考え、専門家としての行動をすることは、42年間、放射線発がん研究に従事してきた私にとって逃れられないことであるからです。その思いに駆られ、事故直後から国民に放射線の健康影響の実態を理解してもらおうと同じ専門分野で活動している有志とともに Q&A 活動 (<http://rbent.jp> 参照) を続けています。しかし、取り巻く環境は厳しく心の晴れる日はほとんどありません。そして、この Q&A 活動を通じて、(1) 我が国の国民が原子力や放射線に関する知識をほとんど持っていないこと（教育基盤の低下）、(2) 我が国の政府や政治家がリーダーの果たすべき役割を果たしていないこと（専門性と志の欠如）が今の社会不安を作り出していることを実感しています。この二つのことは、国民から常識的な論理的思考を奪い、我が国が自分の利益しか考えない者をリーダーと仰いだ魅力のない社会になってしまっている原因になっています。どちらも「経済的価値観」の台頭が根底に潜んでいると言えます。

こうした時には、私達は「諫鼓」のうたで遊んでいる「諫鼓鳥（閑古鳥）」を追い払い「諫鼓」を打ち鳴らさねばなりません。しかし、なかなか「諫鼓」が鳴り響きません。諫言者が「諫鼓」の鳴らし方を忘れてしまったのか？為政者が「諫鼓」の音が判ら無くなってしまっているのか？いずれにせよ、私は今年で 65 歳になるのですから「諫鼓」を打ち鳴らす役目を務めねばなりません。



対馬万松院の石作りの諫鼓。「諫鼓」は、古代中国で、天子を諫めようとする者に打ち鳴らさせるため、朝廷門外に設けた鼓のこと。悪政の時にはこれを鳴らして天子（為政者）の目を覚まさせるが、善政だと打ち鳴らす必要がないので鼓の上で鳥が遊んでしまいその状況を「閑古鳥(諫鼓鳥)が鳴く」という。